様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２１２０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５７０００９

研究課題名（和文）ジャワ、アチェ、陸中沿岸地域における宗教伝統と民俗芸能の映像記録と経験の共有

研究課題名（英文）Religious Tradition and Folk Arts in Java, Aceh and the Rikuchu Coast: Video recording and sharing experiences

研究代表者
見市　建（Miichi, Ken）

岩手県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：１０４５７７４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：民俗芸能の現地調査とワークショップによる経験の共有、映像記録を行った。現地調査の成果としては、見市が岩手県の鵜鳥神楽と門中組虎舞の比較から、震災後の地域社会における民族芸能の役割を、「遊び（ludic）」の要素に注目して分析、論文を執筆した。2015年3月にはジョグジャカルタ（中ジャワ）において鵜鳥神楽の公演とワークショップを行った。映像記録においては、鵜鳥神楽を中心に撮影を続けた他、阿部武司氏が長年蓄積してきたフィルムのデジタル化を進めた。

研究成果の概要（英文）：There are three main results. First, the research team has conduct field research on folk arts. Miichi published on roles of folk performing arts in the disaster affected area in the Rikuchu Coast, Iwate, Japan. By comparing Unotori Kagura and Kadonaka-gumi Toramai, he argued importance of the "ludic" element of fork arts. Second, the team organized a performance and workshop of Unotori Kagura in Yogyakarta, Indonesia, in March 2015, and several other workshops using video recording. These workshops provided opportunities to share the experience among disaster affected communities and folk art practitioners. Third, the team recorded folk performing arts in the Rikuchu Coast and digitalized analog films of Unotori Kagura.

研究分野：地域研究

キーワード：民俗芸能　インドネシア　陸中沿岸　災害　文化財　イスラーム

１．研究開始当初の背景

本研究は、インドネシアのジャワ、アチェおよび日本の陸中沿岸地方（岩手県沿岸部と宮城県の一部）における地域的な宗教文化を映像として記録および関連文献や情報を収集し、その映像記録を当該地域および他地域において上映し、「異文化」間の対話を行いながら当事者の自己認識を知り（あるいは促し）、経験を共有する試みである。ともに宗教に関連する豊かな民俗文化を持ちながら市場経済の浸透や都市化、高齢化、新たな宗教潮流、大規模自然災害や紛争といった急激な社会変化を経験しているジャワ、アチェおよび陸中沿岸地方において、各種の舞踊やイスラーム歌謡（ジャワ・アチェ）、神楽（陸中沿岸）など、歌謡や舞踊、演劇などの宗教民俗芸能を記録し、現地社会との関わりを持ちながら、比較研究を試みる。

２．研究の目的

本研究の目的は大きく以下の三点に整理することができる。

第一にインドネシアおよび陸中沿岸地方における宗教と民俗芸能の記録および比較宗教文化、比較政治的な視野に立った研究である。これまでインドネシアにおいては人類学的な、陸中沿岸においては民俗学的な研究の蓄積がある。これらの蓄積は基礎研究として有用であるが、インドネシアの場合は特定のコミュニティに限定した研究が多く、比較の視点があってもギアツの『ジャワの宗教』（1960 年）が典型的であるように静的に宗教伝統を捉える傾向がある。近年では地域的な宗教のあり方を否定するサラフィー主義の影響の重要性が認識されながらも、本格的なフィールド調査はほとんど行われていない。他方で陸中沿岸における研究はもっぱら「無形文化財」としての記録と日本の民俗芸能における系譜や位置づけを示したものであり、地域コミュニティや社会変化との関わりについては多くが一般的な問題点を指摘するに留まっている。本研究は現状の記録とその整理を行いつつ、芸能そのものや担い手たちや芸能を支えるコミュニティの変化を捉えようとするものである。

第二に記録した映像を当事者である宗教者や芸能の担い手、住民と共に鑑賞し、彼らの自己認識を知るとともに、自らの芸能の豊かさおよび直面する社会変化について再認識を促すことである。後述するように、一部では映像による記録や映像作品の製作が行われているが、映像のフィードバックによる当事者の変化までを追った研究は管見の限り前例がない。本研究ではこうした映像記録や作品を利用して当事者の自己認識とその変化を明らかにする。またインドネシアで行われている民俗芸能の擁護と他の芸能とのコラボレーションによる再生運動、陸中沿岸で行われている震災後の民俗芸能復興活動の研究と、こうした運動についての当事者の反応や評価、変化を明らかにする。

第三にインドネシアのジャワ、アチェと陸中沿岸それぞれにおいてお互いの芸能を映像で鑑賞してもらい、意見を交換するワークショップを開催して、都市化や社会的宗教的な変化による文化変容や自然災害における宗教、民俗芸能の役割について経験を共有することである。都市化はそれぞれ三箇所が、サラフィー主義による影響はジャワとアチェにおいて、災害の影響は中ジャワの一部、アチェと陸中沿岸が共有する経験である。これらの諸地域はこれまで地方自治体などによる国際交流や防災対策、さらに労働移動において関係を持っていたが極めて限定的であった。例外的に実質的な関係を深めようとしているのは宮城県気仙沼市で、同地は 2000 年代初頭から「みなとまつり」でインドネシアをテーマとするパレードを行っており、震災後はバンダアチェ市との交流を始めている。申請者がこうした関係を仲介し、参与観察を行うことで、すでに起こりつつある国際交流活動に寄与するとともに、それぞれの地域が抱えている問題群をより明確に認識し共有することができるであろう。

３．研究の方法

まずジャワ、アチェ、陸中沿岸地域において民俗芸能の映像の撮影と宗教儀礼や祭りへの参与観察、インタビュー、映像の整理を行う。平行してインドネシアにおいては土着的な宗教伝統および民俗芸能の擁護と再生を目指した活動、陸中沿岸地域においては民俗芸能の震災復興支援活動への参与観察と映像記録を行う。各地域で活動する映像作家から映像の提供を受け、内容を検討するとともに過去の映像のデジタル化とアーカイブ化を進める。映像を用いたワークショップを開催し、当事者の自己認識の変化や経験の共有を記録する。地域や宗教を超えた比較の視点、学際的なアプローチによりインドネシアおよび日本の地域／民俗研究における新たな枠組みを提示する。

４．研究成果

本研究の成果は調査と実践（ワークショップによる経験の共有）、映像記録という三本柱からなる。第一に芸能と社会、政治の関係について、中ジャワ、東ジャワ、アチェ（インドネシア）および陸中沿岸北部（岩手県）において、聞き取りおよび参与観察による調査を行った。行政と連携しながら観光資源化が進んでいるソロやジョグジャカルタ（中ジャワ）、その途上のバニュワンギ（東ジャワ）、中央政府および国際機関の文化財指定を通して芸能の保存を制度化しつつある普代村（岩手県）とアチェの事例を比較考察した。

なかでも研究代表者の見市は岩手県の鵜鳥神楽と門中組虎舞の比較から、震災後の地域社会における民族芸能の役割を、「遊び（ludic)」の要素に注目して分析、論文を執筆した。ジャワとアチェでは、イスラームと土着文化の緊張関係についても考察を深めた。第二に 2015 年 3 月にジョグジャカルタ（中ジャワ）において行った鵜鳥神楽の公演とワークショップ、国内外での当事者との交流における経験の共有である。会場となったジョグジャカルタのニティプラヤン村は 2006 年のジャワ島中部地震の被災地であり、芸術村として知られている。神楽公演は国際交流基金の支援を受けて行い、現地の芸能者との有意義なコラボレーションおよび交流が実現した。第三に映像記録の当事者へのフィードバックである。鵜鳥神楽を中心に撮影を続けた他、阿部武司氏が長年蓄積してきた映像記録のデジタル化を進めた。2004 年のスマトラ沖地震被災地のアチェでは、映像を用いた研究発表およびワークショップを行い、経験の共有に努めた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
① Ken Miichi, Playful Relief: Fork Performing Arts in Japan after the 2011 Tsunami, Asian Ethnology, 75-1, 2016. 査読有

② 中川真・福島祥行、都市防災のための地域劇団創生プロセス、都市防災研究論文集、査読無、1 巻、2014、pp.43-49

〔学会発表〕（計　6　件）
① Ken Miichi, Playful Relief: Fork Performing Arts in Japan after the 2011 Tsunami, 5th International Conference on Aceh and Indian Ocean Studies (ICAIOS), 18 November 2014, UIN Ar-Raniry, Banda Aceh (Indonesia).

②Shin Nakagawa, Locating arts carefully: Mechanism for increasing social accessibility, International Conference for Asia Pacific Arts Studies, 31 October 2014, Institut Seni Indonesia, Yogyakarta (Indonesia).

③Shin Nakagawa, Introduction to Socially Inclusive Arts Management, International Conference of Asian Arts Management, 16 December 2014, MAP Publika, Kuala Lumpur (Malaysia).

④ Shin Nakagawa, Listening to the Unheard Voices, The 13th Urban Culture Research Forum, 2-3 March 2015, Chulalongkon University, Bangkok (Thailand).

⑤ Hiroyuki Hashimoto, Restoration of Communities through Folk Performing Arts: Kagura Performers after the Great Tohoku Earthquake, 6 March 2015, Chulalongkon University, Bangkok (Thailand).

⑥ Hiroyuki Hashimoto, From Intangible Cultural Properties to Intangible Culture Heritage: Folk Performing Arts after the Great East Japan Earthquake, East Asian and American Perspectives Conference, 10 December 2014, Honghe University (China).

〔図書〕（計　3　件）
① Helen James and Douglas Paton (eds.), C. H. Thomas: Illinois, *The Consequences of Disasters: Demographic, Planning and Policy Implications*. (Ken Miichi, Saving folk performing arts for the future: A Challenge of Unotori Kagura after the East Japan Great Earthquake in 2011), 2015.

② 岩手県立大学総合政策学部編（見市建、茅野恒秀）、イーピックス、いわて地誌アーカイブ１ 岩泉・海と小本、2014、212(30, 31)

③ 橋本裕之、追手門学院大学出版会、震災と芸能―地域再生の原動力、2015、271

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

見市　建　（Miichi, Ken）
岩手県立大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：１０４５７７４９

(2)研究分担者
中川　真　（Nakagawa, Shin）
大阪市立大学・文学研究科・教授
研究者番号：４０１３５６３７

(3)研究分担者
橋本　裕之（Hashimoto, Hiroyuki）
追手門学院大学・社会学部・教授
研究者番号：７０２０８４６１

(4)研究分担者
茅野　恒秀（Chino, Tsunehide）
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：７０５８３５４０